

ネイチャー高知

No 29 2007年 7月7日発行

活動報告

四万十川自然観察会

5月27日、県西部では初めての自然観察会を行いました。

四万十川流域市町村はもちろん、高知市、土佐市、中土佐町などからも参加があり、総勢約200名で、まず屋形船に乗り通称佐田の沈下橋付近を観察。キシツツジやトサシモツケの花はすでに終わっていましたが、一昨年の洪水の傷跡、川岸の浸食による植物の分布域の変化などを確認、新緑につつまれて野鳥の声を聞きながら、四万十川の初夏を満喫しました。この時期夜は螢が乱舞しているようで、夜の観察会の希望もありました。

その後、川登のデンジソウ自生地に移動。道路工事に伴って絶滅しそうになったデンジソウを自主的に保護しようと、小中学生を含めた地区民の活動について、地区長さんからお話を聞きました。現在、保護区を設け、他の湿地性の植物とともに観察できるように、木道も設置されています。

昼食は入田やなぎ林入り口の芝生で。高知からの参加者のお土産、須崎市、竹崎の玉子焼きをみなさんでご馳走になりました。

午後は、マイヅルテンナンショウの自生地と移植実験地の見学。たくさんの開花固体をみることができました。雄花のみのもの、雌雄両性の花をつけたもの、花のないものなど、栄養状態により性転換するというマイヅルテンナンショウのさまざまな状態が観察できました。その後マイヅルテンナンショウの保護を主に四万十川の環境を考える“マイヅルテンナンショウを考える会”が発足することになりました。

デンジソウにしろマイヅルテンナンショウにしろ限られた愛好家からではなく、一般市民の間からこのような活動が広がることはとても喜ばしいことです。少しずつ輪を広げるために、これからも随時観察会を開催したいと思います。

(報告者： 田城 光子)



(写真右上 デンジソウ 左下 観察中の筆者 提供 倉橋由紀(牧野植物園))

わたしのフィールドノート その7

黒尊いまむかし

田城光子

この2～3年、黒尊に集中的に出かけた。それぞれの樹木の開花にあわせ、標本を採集するためだ。体力に自信がなくなってから久しく遠ざかっていたが、気合いをいれて山に臨んだ。

10年ぶりに登った黒尊の1000mの稜線付近で、わたしは自分の目を疑った。ブナの林床を埋めていた笹が、ほとんどなくなっているのだ。三本杭直下まで行くと、一面土がむきだしになっていて、ひとたび大雨が降れば山が流れてしまいそうになっている。辛うじてそれをくいとめているのは、ヒカゲノカズラなどのシダ類とアセビの幼木である。30年前。テントを張ったこのあたりは笹のスロープが続いていた。お茶を忘れてきたことに気づき、笹の葉をむしって代用にしたことがあった。10年前にも、一部地面があらわになっていたところもあったが、ごく限られた範囲だった。それが今では広範囲になっている。熊のコルのワチガイソウが咲いていたあたりも、そこから見下ろす斜面も落ち葉と土の色だけである。テンナンショウの仲間にも毒があって鹿が食べないのだろうか、やけに目立って生えている。この現象は、山にくるたびにすこしずつ下に向かって広がっているように思う。

5月24日。そろそろアサガラの花が咲く頃だ。雨になる前に見ておきたいと思って出かけた。黒尊川を遡り神殿橋付近まで来て、息をのんだ。川岸の樹冠が真っ白に覆われて、幾筋もの蔓が川面にむかって垂れ下がっている。満開のヤマイバラである。肝心のアサガラは花の盛りを過ぎていたし、延々と続くヤマイバラの大群落に魂をうばわれて、最初の目的はすっかり忘れていた。牧野富太郎博士は防犯のためにジャケツイバラを垣根に植えると良いと言っているが、わたしはヤマイバラを植えたい。どちらも花は美しいが、ヤマイバラのほうが棘がすこしやさしい。花には、泥棒を改心させるだけの鑑賞価値がある。ただ、平地のしかも海に近い我が家の庭で育つかどうかの問題だ。

標高が高くなるにつれて、次第にヤマヤナギが目立つようになる。風が吹くたびに柳じょが舞う。スーパー林道を愛媛県側にまわり、八面山の登山口に着いた。ここまで来たら山に登ろうということになった。頂上には先客がいて食事だったので、少し高知県側下って、満開のオンツツジの下で弁当を開く。向かいの山に目をやると、そこにもオンツツジの群落があり、山がオレンジに染まっていた。ところがそのすぐ横に、ぽっかりと大きく口を開いた裸地が出現している。熊のコルの下では、一昨年まで冷たい水が流れ、苔が青々と生えた岩にヒメレンゲが群生していたのに、今年是一滴の水もない。以前はほとんど人を見かけなかったこの山も、最近では平日でもグループで山歩きをしている人たちに会うことが多く、むき出しになった登山道に土埃がたちそうなのもある。この日も中高年のグループに出会った。

最近設置された鹿対策のネットを眺めながら下山しかけた時、いつも一緒に山歩きをしている犬のはなが、2歳の鹿の角をくわえてきた。この時期、毎年鹿は角を落とし、ミネラルなどの補給のためにまた食べるのだという。こんなに個体数が増えているのにめったに鹿の角にでくわさないのは何故だろうと思っていたが、納得した。

ニホンジカの食害はどこまで進むのだろう。これからも自然に親しみ、山に登り続けたいわたしたちはどうすればいいのだろう。何ができるのだろう。わたしがまだ知らなかった頃の黒尊には、ツキノワグマが棲み、昼でも暗いうっそうとした原生林があったという。車でぐるっとひとまわり、きれいな花だけを眺めながら浮かれ歩いて日帰りができる黒尊も、それはそれで楽しくて悪くはないが、人を寄せ付けないほどの時空を感じさせる、靈気たよう黒尊も見てみたかったと、かつてなことを考えながら歩いている。

わたしのフィールドノート その8

入田やなぎ林界限

田城光子

四万十川橋(赤鉄橋)から上流に目を向けると、右岸に芝生が広がり、その続きにヨシノヤナギ、アカメヤナギ、そしてエノキなどが茂る河畔林が見える。入田やなぎ林と呼ばれている。この入田やなぎ林の春は、わたしの最も好きな季節である。ヤナギの下にびっしりとセリが生えるからだ。セリだけではない。春の七草はたいていこのヤナギの下で揃う。ナズナはあまり見ないが、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザは確実に採れる。ミツバやオオバタネツケバナもある。これがまた絶品である。外来種のオランダガラシ(クレソン)とは品格が違う。ピリリと辛みのきいた、芽がでたばかりのヤナギタデもすばらしい。なにしろ、みんな四万十というブランド品ばかりだ。貧しいわが家の食卓も、こんな食材でどんな高級な料亭にも負けないものになる。そんな贅沢がしたくて、年に2~3回は摘み草に来る。

3月になると、堤防にはいっせいにアマナの花が咲く。アマナは全草に甘みがあって、昔、子供たちのおやつになったと言う。明るい太陽に向かって咲く、まるで幼子の無心な笑顔のような花を見ていると、わたしにはこれを掘って食べようという気持ちは起こらない。そしてアマナは純真無垢なだけではない。夏がくると堤防にはさまざまな草が次々に伸びてきて、生存競争が激しくなる。アマナはその前に、花を咲かせ実を結び、地上の激しい競争を避けて早々に地下にもぐって繁殖を続けるという、なかなかの知恵者でもある。



そんな入田やなぎ林で、四万十川流域ではすでに絶滅したかと思われていたマイツルテンナンショウが、確認された。やなぎ林の中にはメダケ、マダケ、ホウライチクなどが密生した竹藪があり、四万十川再生事業で竹藪が伐採されようとしていた。その竹藪の中にたくさんの個体数のマイツルテンナンショウが自生していることが分り、保護のために工事は一時中断され、調査が行われることになった。まず個体数を数えることから始まった。これがたいへんな作業であった。たくさんのゴミ、ノイバラなどの刺、くもの巣、竹の切り株などに悩まされながら、梅雨時の竹藪を這いずり回った。作業を終えて竹藪から河川敷に出てくると、土建会社の人達が「ご苦労さんですね」と、すっきりした顔で声をかけてくれる。わたし達とは言えば、全身引っかき傷だらけ、頭にはくもの巣、すっかり重くなった長靴をひきずりながら疲労困憊の毎日であった。

た。

全国最大級のマイツルテンナンショウの自生地は、その後一般市民にも公開された。盗掘の心配もあったが、正しい知識を市民にもってもらおうことこそ、本当の自然保護につながるのではないかという考えから、観察会を開催することになった。その後、移植作業や成長過程の観察を続けながら、マイツルテンナンショウを守る会の発足に向けて、多くの市民が動きはじめている。

この夏。やなぎ林では、いろいろな生き物たちに出会った。草むらの中で、両腕に雛を抱きかかえじっとこっちを見ていたキジ。うるさいほど大きな声でさえずっていたオオヨシキリ。草苜蓿によって苜蓿飛ばされ、一家離散の憂き目にあった子ダヌキ。

秋。この界限は落ち鮎漁で賑わう。川岸には、川舟や漁師がどっと押し寄せる。そんな様子を空から数羽のミサゴが見下ろしている。時々ホバーリングの後に、川面を目掛けて突っ込んでいく。漁を終えたミサゴは、大きく羽ばたきながら雑木林のほうに飛んでいった。

それぞれの生き物の顔を思い出しながら、たくさんの生命を育てている四万十川の大きな力を、あらためて感じた。

野山での拾い物(ニホンジカの角・フン)

坂本 彰

自然界の生き物たちは、微妙なバランスを保ちながら種を存続していると思っていましたが、この数年のニホンジカ問題は、そのような考えを根底から覆してしまいました。

高知県でも、三本杭を中心にした黒尊地域や篠山、本山町の奥工石から大森山にかけての地域、馬路村の甚吉森から旧物部村三嶺にかけての地域で、ニホンジカによる被害が深刻になっています。

今回紹介する野山での拾い物は角とフンで、その落とし主はニホンジカです。角を拾ったのは2003年5月3日、場所は香美市物部町の白髪山避難小屋近くの水場です。フンのほうは、何回か拾いましたが、そのうちの一つは、保存袋に「'98.8.16 石立山」と記載してあります。ニホンジカによる被害の話は別にすると、ここではニホンジカのことについて、あちこちの資料を引っ張り出して紹介します。

まず大きさですが、体重は45Kgから80Kg(普通60Kg)ですので、まあ人間並みといったところでしょう。頭胴長は110~170cm、肩高80~110cmです。性的な成長が早く、兵庫県の資料では、1歳でも70%が妊娠し、1歳以上のメスジカの80%が毎年妊娠しているとのこと。このようなニホンジカの繁殖力の強さが、食害問題の根底にあります。



話は拾い物の角に戻ります。角は血管によって運ばれてくるカルシウム分を沈殿させてしだいに成長し、5歳以上の成熟した固体では三つ目の叉が分かれ始めるそうです。写真のものは2段目が折れていますが、立派な3段の角ですので、これの元の持ち主は立派なオスだったと想像されます。オスジカの角は、発情期(9月下旬から12月)を過ぎて春先になると根元から脱落することは、よく知られていることです。

一方のフンですが、写真のように長円形で片方がとがって、砲弾型をしています。最近カモシカも見かけるようになりましたが、カモシカのフンも同じ形をしており、フンの形で見分けることはできません。しかし、カモシカは1回分のフンが300から500粒で1箇所固まっているのに対し、ニホンジカは5から30粒(多くても100粒)で、パラパラと散らばっていることから区別がつかます。また、4月から5月にかけて水分の多い食物を食べたときには、フンがくっつきあった「おむすび」のようなフンをすることがあります。

ところで、ニホンジカによる食害は農林業だけでなく、これまで豊かに自然が残っているといわれていた三嶺周辺など奥地の森林に大きな影響を与えています。連絡会の会員の皆様にはこの問題について、関心を持っていただきますことを願っています。



三嶺山系でもニホンジカによる深刻な被害

坂本 彰（自然観察指導員連絡会代表世話人・三嶺を守る会理事）

三嶺を守る会では、5月27日(日曜日)これまで行ってきた清掃登山にあわせて、三嶺一帯のニホンジカによる食害調査を行いました。

これは、ニホンジカによる被害は、四万十市(旧西土佐村)や本山町などから報告されていますが、石立山から三嶺にかけての地域でも、ここ数年顕著になり、キレンゲショウマやギンロバイといった稀少植物が、絶滅の危機に瀕しています。これらの現象は、登山者以外はあまり入らないような場所で発生しているため、県民の方の目にとまらず、関心も低いですが、状況は非常に深刻です。このような事態を把握し、それを基に行政に対して対策を要望していくため、四国自然史科学研究センターと共同して、登山者による影響調査を実施することとしたものです。

私もメンバーの一人として調査に参加しましたので、調査の概要と、担当したコースの状況を報告します。

(調査方法)

調査は、高知県香美市物部町、三嶺(標高1,893m)、白髪山(標高1,770m)、綱附森(標高1,648m)、天狗峠(標高1,790m)で囲まれる区域にある登山道を、10の区域に分かれて踏査し、登山道及びその周辺の植物に対する食害、ニホンジカの痕跡等を確認し、定められた用紙に記録するとともに、必要に応じて写真を撮影するという方法で行いました。

(ニホンジカの痕跡)

その結果、ニホンジカの痕跡としては、調査ルート全域にわたって足跡やフン、食痕が確認されました。また、葎生越ルートでオス2頭、メス2頭、不明1頭の合計5頭、堂床分岐から地蔵の頭の間で死体1頭(オスメス不明)、カンカケ谷コースで鳴き声(警戒音・オスメス不明)が確認されました。

(被害の概要)

ニホンジカによる被害は、林床の荒廃、ササ(スズダケ)の枯死及び衰退、樹皮剥ぎによる樹木の立ち枯れ、植生の単純化などが確認されました。今回の調査で確認されたニホンジカによる影響は次のとおりです。

① ウラジロモミやブナを中心とした森林帯で、ディアライン(※1)が広い範囲で形成されて



います。林床の中・大型の草本類、小型の木本類が被害を受け、林床が荒廃するとともに稚樹が消滅しており、このまま推移すると森林の維持更新が困難な状況に陥ると推測されます。また、かつて林床を広く覆っていたササ(スズダケ)も衰退が著しい状況が確認されました。

② 稜線のウラジロモミは、樹皮剥ぎの被害が著しく(写真左)、立ち枯れするものあるいは今後立ち枯れするであろうと思われるもの

が多数見受けられました。

- ③ 稜線の笹原を構成するスズダケは、葉が淡黄白色になって枯れたような状態になっている地域が確認されました。ただ、この原因については、「ニホンジカの食害によるものとは考えにくい」との見解があり、原因について早急な調査が必要だと考えます。
- ④ 食害を受けている木本類としては、スズダケの他、ウラジロモミ、ハイイヌガヤ、イヌガヤ、ハリモミ、ツガ、カヤなどの針葉樹、ナナカマド、ヤマヤナギ、リョウブ、オオカメノキ、ヒメシャラ、マユミ、キハダ、イヌツゲ、カエデ類などの広葉樹が確認できました。特に、ウラジロモミなど針葉樹については、稚樹から大木まで採食圧を受けています。
- ⑤ さおりが原などでは、ニホンジカの不嗜好性植物であるバイケイソウのみが繁茂しており、植生の単純化が確認されました。
- ⑥ これまで採食されていなかったシコクブシ（トリカブトの仲間）、ヤマシャクヤク、ツルシキミにまで食痕が認められたことから、ニホンジカの採食条件が悪化していると考えられます。
- ⑦ シコクシロギクについて、度重なる食害によって矮小化するという現象が確認されました。（これは今回の調査でなく2000年と2006年に採集した標本の比較によるものです。）
- ⑧ 稜線近くの森林と笹原の境界あるいは森林内の傾斜がきつい斜面で、植生の衰退とニホンジカによる踏み荒らしにより、土砂が流出している箇所や土砂崩壊の危険性が高いと思われる箇所が認められました。

注 ※1 ディアライン：鹿摂食線。森林の下枝や下草がなく、遠くまで見通しがよくなっている状態。この状態は、森林の190～195cm位の高さまでの草本や低木類、下枝を、ニホンジカが食べるためにできる。

（フスベヨリ谷～頂上の概況）

今回の調査で私が担当した、八丁分岐～フスベヨリ谷～三嶺頂上のコースでは、ルート全般にわたって食害を受けています。海拔1,500m以下の森林帯では、高木類のうち、ウラジロモミの樹皮剥ぎの被害が大きく、さおりが原分岐では、カヤも樹皮剥ぎの対象になっていました。ウラジロモミについては、稚樹が幹に被害を受けたことにより枯れるものが多く、次の世代が育たない状況になっています。（写真右）



下層植生は、全域にわたって食害にあっており、かつては、ウラジロモミやツガ、サワグルミ、トチノキなどの林床にギンバイソウ、テンニンソウ、フタリシズカなどの中・大型の草本類やハイイヌガヤ、オオマルバノテンニンソウ（トサノミカエリソウ）、ヤマアジサイなどの低木類が見られましたが、今はほとんど生育していません。

特に、かつて林床を占有していたハイイヌガヤはほぼ全滅に近い状態で、早急に食害防止対策が必要だと感じました。またスズダケも食害により大きく衰退しており、裸地化した斜面では土砂の流出が懸念される状態になっています。

テンニンソウは被害を受けつつも、旺盛な成長力(?)で群落を維持していますが、今後何らかの対応の必要があります。またカンスゲについては、全域で地上部の一部のみが残されている

状況になっています。

かつて沢の上流端（例えば三嶺頂上手前の水場付近）にあった「お花畑」は消滅し、ナンゴククガイソウ、シシウド、ツルギハナウド、シコクフウロなども見ることができなくなっています。

また、この付近では、スズダケが新しい葉をつけずに全体が茶色で枯れたような状況になっていますが、その原因については、全てニホンジカの食害によるものかどうかは、なお検討が必要だと思えます。

三嶺頂上から西熊山を經てお亀岩に至る稜線部のササ原（ミヤマクマザサ）では、歩道（登山道）以外にニホンジカによる獣道が遠方からも視認でき、獣道上にフンも多いが、ミヤマクマザサに対する食害は確認できなかった。

希少種については、フスベヨリ谷の上流部に生育していたキレンゲショウマが、これまでの調査でほぼ絶滅したのではないかと推測されていますし、オヤマボクチ、シコクシロギクも食害の影響を大きく受けています。

なおニホンジカの不嗜好性の草本類としては、テンナンショウ属の植物（ユキモチソウ、アオテンナンショウ、マムシグサ、シコクテンナンショウ、ミツバテンナンショウ）、ナツトウダイ、バイケイソウ、ヤマシャクヤク、シコクブシが認められましたが、このうちヤマシャクヤクとシコクブシについては場所により食害を受けているものもありましたので、これまであまり食べてなかった植物も食べざるを得ない状況になっていることが推測されます。



（写真説明： 左の写真はほとんど被害を受けていない林床の状況。このように、林床にはスズダケが繁茂し、林内を歩くときには「藪漕ぎ」をしなくてはならなかった。

写真右はさおりが原～カヤハゲにいたるコースの林床の状況（2007.5.27撮影）。食害によりスズダケが衰退している。）

（ニホンジカによる影響調査にご協力ください）

三嶺を守る会ではニホンジカによる自然への影響調査をしています。

調査票を準備していますので、ご希望の方にはお送りします。山登りや植物調査などで、被害を確認されましたら、ぜひとも報告をお願いします。

また、三嶺を守る会の調査報告書をご希望の方がおいでましたら郵送しますので、坂本までお知らせください。

NACS-J からのお知らせ

今年はクマゼミの出現が遅いようにも思いますが、皆さんの地域ではいかがでしょうか？

日本自然保護協会の自然調べ 2007 は、「夏休みセミのぬけがらをさがせ！」です。検索表などは、結構専門向けのものになっており、大人がチャレンジしても楽しいと思います。

かつての夏休みの宿題を思い出し、ご自分で取り組むのもよいですし、子供さんやお孫さんの夏休みの自由研究の一つとして一緒に挑戦してはいかがでしょうか？

調査の方法や検索表などは <http://www.nacsi.or.jp/event/ss2007/start/index.html> から、ダウンロードできます。



会費納入のお願い

会費を未納の方は納入をお願いいたします。

納入方法は郵便振替が安価で便利ですので、郵便局備え付けの振替用紙を利用して、振込みをお願いします。

郵便振替の振込口座番号は **01630-9-41422**

加入者名は **高知県自然観察指導員連絡会** です。

「ネイチャー高知」の原稿を募集します。「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の年2回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO 29

事務局 780-8075 高知市朝倉南町 3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail akira@baobab.or.jp